

[成果情報名] 近年の紀南沿岸におけるイサキの資源状況

[要約] 漁獲量と市場における体長測定調査の結果に基づき、紀南沿岸におけるイサキの年齢別の漁獲尾数を算出した。また、VPA (Virtual Population Analysis) により、資源の増減の概要を推定した。その結果、近年は漁獲尾数・資源尾数とも減少傾向を示したが、漁獲物中に占める小型魚の割合は減少しており、小型魚を再放流する資源回復計画が確実に実施されていることが裏付けられた。

[キーワード] イサキ, 漁獲尾数, 資源尾数, VPA, 資源回復計画

[担当機関名] 水産試験場・資源海洋部

[連絡先] 0735-62-0940

[部会名] 水産

[分類] 研究

[背景・ねらい]

イサキは紀南沿岸（図1）において重要な漁獲対象魚種の一つであり、一本釣りを中心に定置網や刺網で漁獲されている。しかしながら、この海域のイサキは資源状態が悪化しているとみられ、小型魚を再放流する資源回復計画が実施されている。同計画の進行管理のためには、資源状況のモニタリングが必要である。

[成果の内容・特徴]

1. 漁獲量は128～277トンで推移し、2001年以降は減少傾向にあった（図2）。
2. 漁獲尾数は58～165万尾で推移し、2000年以降は減少傾向にあった（図3上）。年齢別では、2歳魚が31～57%、3歳魚が24～38%と多くを占めていた。1歳魚は1998、1999年には10%以上を占めていたが、その後徐々に減少し、2006年は1.3%とほとんど水揚げされていなかった。
3. 市場での尾叉長測定結果からも、小型魚の水揚げが近年減少していることが分かった（図4）。これらの結果は、小型魚の再放流が確実に実施されていることの現れであると考えられる。
4. 資源尾数は154～522万尾で推移し、2000年以降は減少傾向にあった（図3下）。ただし2006年の推定値は過小評価の可能性が高く、今後データを追加すれば、もう少し加算されるものと考えられる。

[成果の活用面・留意点]

小型魚再放流の効果が本格的に現れるにはあと数年かかると推測され、引き続き資源管理を実施するとともに、資源状況のモニタリングを継続する必要がある。

[具体的データ]



図1 イサキの調査地

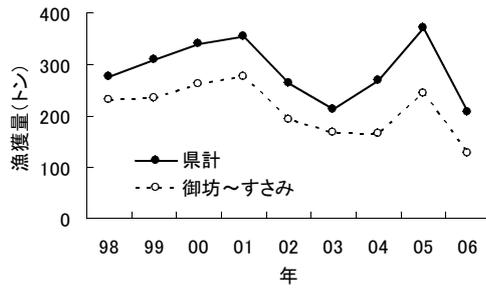


図2 イサキ漁獲量の経年変化

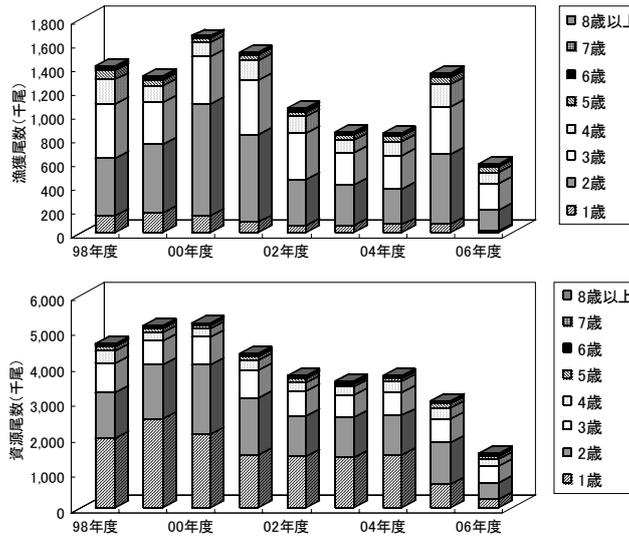


図3 年齢別漁獲尾数(上)と年齢別資源尾数(下)

※2006年度の資源尾数は、データを追加すればもう少し加算される可能性が高い

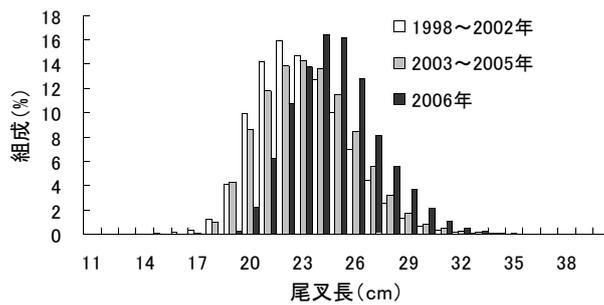


図4 イサキ漁獲物の尾叉長組成

[その他]

研究課題名：資源管理体制・機能強化総合対策事業

予算区分：国補

研究期間：平成10年～19年度

研究担当者：土居内 龍

発表論文等：平成19年度日本水産学会近畿支部後期例会にて口頭発表

